

テーマ：「土木デザインからインフラデザインへ」

講師：佐々木葉氏（早稲田大学創造理工学部
社会環境工学科教授）

日程：2026年5月14日



我が国における土木デザインの出発点は1960年代の高速道路設計です。安全でストレスの少ない走行を可能にする道路線形や、トンネルを抜けた先に山が見えるといった風景体験を含めて道路を捉える発想から、今日の我が国における土木デザインが生まれました。そして社会文脈が複雑化する昨今では、インフラの概念にも変化が見られ、デザインの対象は土木構築物だけでなく、コミュニティ、文化、包摂的ケア、居心地などの社会・心理的な基盤にまで広がっています。

宮城県石巻市の津波堤防を設計した際には、堤防を地形のような造形とし、その天端を背後の施設のレベルと繋ぐことで水辺とまちの関係を切らないようにしたことで、堤防という暴力的な構造物は、人々が散歩をし、川を眺め、イベントをする、日常空間となりました。また岐阜県郡上八幡では40年にわたり、水のある暮らしの保全と更新をしています。社会実験では細路地が、子どもが走り回り、お年寄りが立ち話をし、地域の記憶がよみかえる場に変わり、道という小さなインフラの可能性を見出しました。

インフラデザインとは、単にインフラを「つくる」ことではなく、自然環境・人工環境・社会関係資本を統合しながら、そのインフラが「誰の何に変化を与える可能性を持つのか」を問い続ける営みだと考えます。そのような視点から構築され、継続的に活動やプロジェクトが生み出される「イネーブリング・インフラストラクチャー」を目指し、日々活動しています。

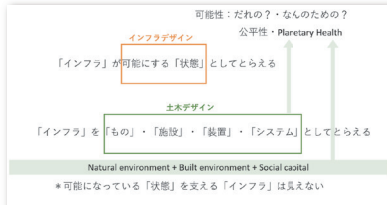
早稲田大学理工学部建築学科卒業。東京工業大学大学院修了。東京大学・名古屋大学助手、日本福祉大学助教授などを経て、2003年より現職。専門は風景論、まちづくり。建築と土木の境界を越え、地域の歴史や文脈を活かした公共空間の創出とインフラデザインを研究・実践している。2024年に初の女性会長として土木学会第112代会長就任。NPO法人郡上八幡水の学校副理事長を務めるなど、社会活動にも精力的に取り組んでいる。

図1



石巻元気いちば前の堤防
背後の商業施設と堤防が同一レベルで接続される

図2



土木デザインからインフラデザインへ
インフラは、構築物やシステムをつくることではなく、
人々に活動可能性を与える「状態」をつくること